



Title	メーヌ・ド・ビランと習慣の問題（承前）：習慣と能動性
Author(s)	三輪, 正
Citation	カルテシアーナ. 1990, 10, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メーヌ・ド・ビランと習慣の問題（承前）

—習慣と能動性—

三 輪 正

二、知覚の習慣

知覚は習慣によってより判明になってゆく。かような知覚の習慣によってこそ「もろもろの仕事や能力における真の進歩がはじまる」とビランは書いている。(p. 198)とここでこの習慣のかような好結果にもかかわらず、彼はこの知覚の習慣を受動的習慣のなかに分類する。これは一見奇妙に思われよう。この間の事情をチスランの次の言葉はかなりよく説明するものであろう。「動作は習慣的になるに従って自動的に、また無意識的になる。メーヌ・ド・ビランはこの変化に強い印象をうけてそのため、習慣的知覚を受動的習慣のなかに組み入れることになった。」(p. LV)というのである。ビラン自身の次の言葉もこの見解を支持するであろう。「運動がより容易になるに従い、その運動に関連する知覚もより正確、より明晰になる。それとともに人は自分が知覚において果たしている役割を忘れ、その能動性は見失われるにいたる。すべては感覚の受動性に逆戻りするようみえる。」(p. 199. Cf. pp. 68-9)と。このことに加えて、『習慣論』の頃のビランにとっては人為的記号の使用のみが精神活動における能動的なものであったということも、理由の一つにあげられよう。いずれにせよ、能動的能力であるはずの知覚が習慣化するとともに受動的になるということ

は、感覚がそれ自身のうちになんらか能動的なものを持つということと同程度にビランの理論的立場にとって厄介な問題であり、これらの問題こそビランをして、何が思考において能動的なものであり何が受動的なものであるかの区別を考え直させる契機となるものである。

知覚が習慣によってより判明になってゆくことに立ち帰ると、その原因として、第一に始めにあった感覚的受動的なものが消滅すること、第二に知覚の能動性が密接な関連をもつ運動が習慣によって容易かつ明確になってゆくこと、第三に他の運動または印象との連合 association がつくられること、があげられる。(Cf. p. 50) 第一の原因については既に論じたとおりである。第二の原因についてはいえば、これこそが知覚を判明にするのに特に与っているものである。

一般的に言って、感覚器官の働きと運動器官の働きとの間には相互的相補的な関係がある。(Cf. pp. 66-7) 例えば距離の知覚は子供のばあい、子供が歩くことを覚えてはじめて可能になる。この意味で知覚はそれに対応する運動に依存しており、したがって知覚の習慣もまた運動の習慣に依存していることになる。ビランはこの箇所で意志的あるいは随意的運動にたいする習慣の影響を一般的に考察している。ビランはこの影響に認められる原則的事実として次の二つをあげる。「一、すべての随意的運動は頻繁にくりかえされるとだんだんとより容易、迅速かつ正確になる。二、その運動にとともなり努力感や印象は、運動が容易、迅速、正確になるに比例して減退していく (p. 67)」の二つである。習慣化した知覚が判明になることはこの原則的事実の前者の一例ということになろう。習慣的知覚の判明化はそれ自体としては有益なことであり、習慣が人間の進歩向上の「推進力」となりうるのには主にこれによってである。原則的事実の二の努力感の減退もそれ自身としては望ましいこと有益なことである。努力感の減退によって例えば、始めは指や弓の動きにのみ気をとられていたヴァイオリン初心者練習によって上達するにつれ苦痛感がうすれ、ついにはただ演奏の音楽

的效果のみに注意を払いうるようになるのである。努力感の消滅によって我々は注意をよりひろくより遠くにおし及ぼすことができるのであり、このことなしには我々は始めの運動にいつまでもかかずらい悩まされつづけることになる。

ところでほかならぬこの努力感の減退ということこそ運動の習慣と知覚の習慣との受動性を露呈するものだといはれる。ここからはかんがえる。動作がしごく容易になるとともに「筋肉の努力感の消滅するか、またはその努力感の産物である外部抵抗のかたちでしか感じられなくなる」と彼は書いている。(p. 70) いったんこのような状態になると、もはやこの外部抵抗しかひとの注意をひかなくなり、その時ひとは「自己固有の力を忘れ、この力を対象あるいは抵抗対項 *terme résistant* にそっくり移しかえ *transporter*」この対象が情性、固さ、重さという絶対的性質を持つとする。それどころか更にひとは抵抗がひとから独立にそれ自身で外部に存続しつづけるように考えさせられる……」(ibid.) われわれの内なるもののこの言わば外化 *exteriorisation* は習慣の最も重要な作用の一つである。この外化のことをピランは別の箇所では次のように表現している——ひとは「(自己の活動の) 所産を自分のそとに全面的に移しかえ、触覚的な形体の中に色覚的な形像を自然そのものように苦もなく(努力なく) 知覚するのである」(p. 71) この例に見られるように外化はそれ自体としては人間の活動にとって好都合であり有益でさえある。しかし他方ではこの外化こそ我々人間固有の能動性を覆いかくし、気付かなくさせるものであり、それによって知覚の習慣に受動性の刻印をおしつけるのである。(Cf. p. 72) 「(身体の) 働きの完全になるにつれ知覚は一方で極めて判明かつ正確になるが、しかし他方でひとは自分が果たしている能動的役割や……活動や判断に対してまったく盲目になってゆく (pp. 88-9)」であり、「知覚の……機能は、常に本来の感覚のそれに近づこうとするのである」(p. 88) 運動性の向上とともに、ひとは徐々に自己自身の能動性を忘却し、疎外し、それによって感覚の受動性に接近するのである。運動は習慣によって運動の主体と

しての人から独立になるにつれ、この主体の能動性を徐々に窒息させる、ときえ言うことができよう。

知覚の判明化の第三の原因、他の運動や知覚との連合について言えば、それは想像と判断との問題にはかならない。よく知られているように知覚は極めて単純にみえる知覚でも多くの知覚の複合された結果であり、ひとは現在の感覚がしめすものよりも遙かに多くを知覚するものであって、知覚には過去の印象の想起や比較が不可分にともなっている。(pp. 72-3) このことは知覚には想像や判断の契機が含まれるということであり、したがって知覚の働きを真に知るためには、内的中枢器官 *organe intérieur et central* (p. 74) に遡らねばならないことになる。この器官のことをピランは「外界の作用の結果を順次取り集め、固定し保存する唯一の器官であり、現に感覚を刺激している印象と既にこの器官を刺激した印象とを言わば同じ一つの枠のなかに統一する」と説明し、この働きも反復によって強化され容易かつ迅速になるとする。(Ibid.) とところでピランは、容易かつ迅速になるとともに知覚は「ほとんど全く内的」になるという興味深い注意を加えている。この意味することは、ごく簡単な外部刺激によってほとんど自動的に全知覚作用が展開するということであり、「熟知の対象のごく軽い接触、極めて簡単な覚知によって想像力が働きたす。想像力是对応の態勢ができていたのであって、完璧な図像、立体的なペースペクチヴが一瞬の内に、なんの努力もなしにくりひろげられる (p. 75)」のである。これはベルクソンの言え、過去が現在にとつてかわるということである。この点から知覚の習慣を特長づければ働きの内化ということになる。ときろで知覚の習慣は先程見たとおり能動性の忘却という点では、外化として特長づけられた。ピランはこの外化というところに実体概念そのものの起源を見ようとしている。

例えば触覚と視覚との協働についてみてみよう。この二つの感覚のあいだの密接な関係はよく知られている。「我々

が物を見るばあい必ず既に知覚の習慣を持つ者として物を見るし、我々が物に触るばあいかつて見たことのない者として物に触ることは決してない」とビランは書いている。(Ddid.) こうして我々はあるいは単なる色のなかに抵抗を知覚するのであり、あるいは大きさをとおして距離をとらえるのである。かような観念の連合が習慣の影響で強化されるのは言うまでもない。ビランはここですぐ付け加えて「習慣によって判断が迅速になり無意識になるとともに、主体の能動性については完全に外部対象に移しかえられてしまう(p. 77)」と書いている。こうして例えば、色、形、距離、柔らかさなどが主体の外に投射され、何らかの対象の上に積みかさねられることになる。これが実体概念の起源だというのである。この点については以下でさらに詳しく論じられる。

知覚の習慣は機能という点から見れば内化として特長づけられ、知覚内容という点から見れば外化として特長づけられる。しかしこの両者に共通してそこにはひとつの自動機制の展開が見られる。「無数の仕事や運動がたがいに連合し、極度に迅速、容易になること、努力の減退と消滅、行動における無意識、行動結果の明晰正確、これらが習慣の大綱である(p. 77)」とビランは書いている。知覚の習慣をよりよく見るため次に習慣的判断のビランによる分析を見てみよう。

三、判断の習慣

メーヌ・ド・ビランの習慣論における最も興味深く最も重要な箇所がここにある。「知覚の連合と知覚の連合から出てくる様々な習慣的判断とについて」と題された章の冒頭でビランは「知性 *entendement* の本性は中枢器官の第一習慣の全体に他ならない(p. 80)」と書いている。実際そこで扱われるのは知性の発生の問題であり、また記号の形成の

問題でもある。この章を掘下げることによってピランの哲学の以後の発展があると言える。まず同時性による知覚の連合の問題が、ついで継起性による知覚の連合のそれが論じられる。この二問題はそれぞれ実体性の問題、因果性の問題に他ならない。これらに加えてさらに想起 *remiscence* と原初型 *archétype* の問題が論じられる。

同時性による知覚の連合の問題あるいは実体の問題をピランは努力の印象から出発して説明する。努力には主体と対象という二項の対立が前提される。主体が受動的に感覚するだけであるならば、主体はみずからの状態あるいは対象から自己を区別することがなく、自己自身を知ることがない。「主体は自己をまわりから区別することなしには、自己を対項に比較することなしには、自己を認識することができない。」(p. 81) 認識のためには二項の対立、したがってなんらかの努力が必要とされる理由である。ところでピランによると、この場合主体は対象のなかに自己を知覚し、「いわば自己を写す *se mirer*」という。(p. 81) 対立の所産である諸状態を対象のなかに移し入れるというのであろう。ピランは付け加えて「主体が区別し比較する全てを主体は対象へ関係づける」と書き、この関係づけから、物体部分への感覚諸状態の内属関係 *rappori d'inherence* や抵抗する外部基底 *soutien extérieur et résistant* への判明な諸印象の内属関係が生じるとしている。これらの内属関係は「あまりにも深く習慣化したため、そのことに驚きその原因をたずねるには反省能力の全体を必要とするような」判断だとも言われている。(Ibid.) こうして対象についての諸感覚は単なる感覚としてはたがいになんの関係もないが、対象の周囲に集まり、対象の性質として対象に接着するということ。ところでここでピランは面白いことを言っている。それは一旦かような関係ができあがると各々の感覚性質は同じ対象の他の性質を指示する記号としての役割をはたすようになるということである。(Ibid.) これが自然記号ないし習慣記号である。それは「人工記号が記憶にたいして行うのと同じ働きを、感覚や想像にたいして行う」とも言われている。こ

の記号の効用は明らかである。たとえば水平線の小さな点から水夫が船を見てとるのはこの種の記号の働きによってである。しかしかような記号の限界も明らかである。「たとえば黄色だということから金の諸性質を想定したり、白ということから砂糖だと判断したりすれば」とんでもないことであって、「早く判断することは確かに結構なことだが、大切なことはよく判断すること、真に存在するもののみを見ることである」とピランは書いている。(p. 83)これは因果性の判断についても言えることである。

因果性ははじめ次のように説明される。いくつかの印象が継起するとき、同じ仕方でそれらの印象を再現させようとする「限定」が形成される。他ならぬこの限定のうちには後関係 *rapport de priorité et de postériorité* の基礎がある。一連の印象の限定のなかで、あるならぬかの項はその項につづく項にたいしては原因と呼ばれ、その項に先立つ項にたいしては結果と呼ばれる。これがいわゆる因果関係の根拠であるというのである。これは努力すなわち主体の能動性から出発した内属関係の説明と異なり、まったく観念連合主義的説明である。ところでピランはこの説明の不十分さにはやく気づいたようで、注のなかでその訂正を試みている。彼はそこでは次のように書いている。「原因という観念はもと我々の運動や我々の本来的な行為の行使から来るものである。我々の周囲を変化させ、我々の能力を発揮することをとおしてのみ我々は我々自身を能動的な原因と見なすことができる。我々の力を（始めは意志的に、あとでは意志から独立に）動いている物体に移しかえることによって、我々はそれらの物体を原動者として、力を持つものとして、原因として見なす。」(p. 87, note) こうして因果関係も内属関係と同様、主体の運動的能動性の外部への移しかえにその起源を持つことになる。ここにも習慣の一般的特長すなわち主体の能動性の外化ということがみられる。この習慣の効用は明らかである。日常行動の殆どを動かすものはかような習慣である。外界に変化のないかぎりこの習慣で

ことがたりよう。しかしそれだけではしばしば大きな誤りのおそれのあることも確かである。

ビランはつづいて想起と原初型の問題を論ずる。想起の問題は再認のそれでもある。再認は習慣によって限りなく迅速になる。ひとは日常接する対象には軽い一瞥をなげるだけで認識する。それが繰り返されるにつれ過去が現在にとっかわり、対象における新しい変化が気づかれなくなることはよく見られることである。

原初型とビランが呼ぶものは、理想型 *modele ideale* とも、原形 *prototype* とも言い換えられている。美しい、正しい等の観念はその原初型として「理想的な美」や「絶対的正義」を持つ。ビランによればこれらの原初型は「なんらかの印象を敷き写し」*calques sur certaines impressions* (p. 95)「習慣によって我々の精神に刻みこまれた *bravés dans notre esprit* (p. 96)」ものであって、「われわれの感性の第一の法則というよりむしろ想像力が取得した習慣に関連する」のである。実際美の観念は風土によって民族によって変わる。原初型は習慣の所産として、模範例で考えられても言葉以上の存在を持つものではなく、主体の能動性の外化の一形態ということになる。

次の文は習慣的知覚の構造を要約するものであろう。「ひとは自己自身の内に起こることに気づかず、自己自身の力を抵抗する対象に移しかえ、自己自身から脱ぎ取ったものを対象に着せつける。」(p. 97)

四、感情の習慣

「想像力固有の感覚的習慣」と題された第四章でビランは、驚き、恐れ、喜び、悲しみなどの感情における習慣を考察している。感情は非意志的で受動的なものとして一般的には習慣の影響によって減弱し消滅する。これは受動的能力にたいする習慣の一般法則に合致しており、したがってこの点に大きな問題はない。

問題が出てくるのは、ある種の感情が反復されるにつれ、習慣の一般法則に反してより活発、より強力になるように思われるときである。それは例えば想像上の人物や迷信的な事物にたいする感情に見られることである。かような感情はいったん形成されると想像力にまといつて離れず、想像をいっそうかきたてる。その時「同じイメージ、同じ感情、同じ儀礼が、習慣の普通の影響によって弱まるどころか逆に勢力を増してくる。それが快であるにせよ、苦であるにせよ、それらは不可欠な必要物となり……、ひとは日々より強く、より頑固にそれらに執着し、もはやそれらから離れることができないし、離れようとしなくなる。」(p. 101) 多くの狂気、多くの誤謬がここからでてくる。

感情的なもののこの強化はなんに由来するのだろうか。狂信的なものへのあの固執は何にもとづくのだろうか。ビランは始めはただ「想像力は一種の本能的なものによってあらゆる種類の迷信的観念の産出に向かうようにみえる (p. 100)」と言うにとどまっている。より適切な回答は恐らく次の言葉に見いだされよう。「真の原因に対する無知から生じるところの目に見えない力への恐れは始めからあらゆる恐れの中で最も強力なものである。同じ源を持つ希望もあらゆる希望のなかで最も強いものである。なぜなら感情の強さと固さは見通しが利かないこと、対象が遠いこと、関連する思想が曖昧漠然としていることに比例するからである。」(p. 101) もしそうであるなら感覚がそうであったように、感情もなんらか能動的なものを含むことにならう。ビランははっきりとはそのように言っていない。しかし、感情の習慣による強化は「絶えず再び強まりくる存在 *sensiment de l'existence qui tend incessamment à se raviver*」に関連すると言っている。(p. 102) 事態は感覚の習慣の場合とはほぼ同様であらう。

我々はここにも外化という習慣の一般的特長を見いだす。感情の習慣は主体の欲望をイメージの形で外部に投射するものであり、いったん外化されたイメージは主体から独立になるとともに、主体に新しい欲望をかきたて、主体を苦し

めるに至るのである。この外化という事態は情念 *passion* の習慣にはなおいっそう明らかであろう。

例えば名誉、愛、金銭等の観念的仮想的対象にたいする度のすぎた崇拜がメーヌ・ド・ピランの言う情念である。

(Ibid.) 情念の対象は多かれ少なかれ容易には手に入り難いものである。したがってそれは「不安と希望を交互に刺激する。それを手に入れるには多くの障害、困難があり、また機会がある。……これが我々を奴隷化する情念の第一の原動力である。(Ibid.)」とピランは書き、付け加えて「ここに情念がもたらす諸観念と、情念がかきたてる諸感情との執拗さと増大する力との原因がある」と言っている。情念が人間のなんらかの能動性に由来すること、情念の対象がこの能動性自体の外化し不変化した形体に他ならないことは以上から確かであろう。次の語は情念の習慣を要約するものであろう。習慣は「想像力を弱めるどころか、反対に同じ能動原因を想像力に親しませ、想像力を頑強に同じ方向におしつけ、鉄の鎖でしばって想像力を虜にする。」(p. 103) ひとはどこでも自己が生みだしたものの奴隷となっているのである。

感情や情念は欲求、不安、希望と不可分であるからして、その欲求の対象が手に入れば同時に感情や情念も表面的には消える。しかしだからと言ってそれらが無くなったわけではない。我々の日常行動の多くには、対象が得られたため意識されなくなった感情や情念が混じりこんでいる。ひとは長く共に暮らした伴侶への愛情を意識することがなく、また生まれ育った国への愛着を意識することもない。その愛情がよみがえるためにはその対象が失われるか、またはそれから離れるかしなければならぬ。「感情の」この絆を知ろうと思えばそれから離れようとしなければならぬ。絆がゆるみ、破れるのを感じなければならぬ！(p. 105)とピランは書いている。かような経験も真の自己認識のための一つの条件と言えよう。

ところで習慣の分析を進めている我々にとってより興味深いのは次の言葉である。「決して同じ段階、同じ調子の継続にとどまっておれない、ということが我々の感受性 *sensibilité*——それがどのように働くにせよ——の一般法則である。感受性は常により高まらねばならないのである。」(p. 104) この常により高まってゆく感受性が序文で定義されたような受動性であり得るだろうか。ピランは付け加えて、この感受性の働きから「我々における良きものと悪きものとのすべてが出てくる (p. 104)」と言い、また「したがって想像力は人間の活動 (能動性) の偉大な原動力であり、人間の進歩と向上の主要な原因である (p. 104 note)」と言う。「受動性≡感覚」「能動性≡運動」という序文の図式はもはや当を得ないのである。想像や感情も感覚と同じようになんらか能動的なものを持つと言うべきであつたらうし、またメーヌ・ド・ピランが能動性と運動とを区別していたならば、運動の昂揚とともに主体の能動性は縮小し消滅するとも言つたことであらう。しかし恐らくデステュット・ド・トラシの強い影響のもと、そこまで言うには至らなかつた。実際、トラシの動覚理論だけでは、ピランは習慣の影響の分析において至るところ矛盾に蓬着せざるを得なかつた。しかしかような矛盾への反省をとおしてこそ後のピランの哲学は生まれてくるのである。

第四章 能動的習慣

一、分節記号の問題

「受動的習慣」「能動的習慣」の語の曖昧さについては先に触れた。そもそも習慣に能動的なものがあるかどうかを問題にすることもできよう。実をいえばピランが「能動的習慣について」と題した後半部分で論ずることは「随意的分節記号の使用にもとづく動作の反復について」である。(p. 115) 彼の場合能動的習慣とは人為的分節記号の習慣に他な

らない。この考え方は人為的記号の使用をもって能動的な思考活動とみなした観念学の影響によるものである。⁽¹⁴⁾

人為的記号が思考活動の発達にたいして必要であり有益であることは確かである。印象や記憶は不安定であり忘れられやすい。我々が自由に操ることのできる何らかの動作に印象や記憶を結びつけることによって、我々はちょうど手足を動かすようにそれらを自由に操作できるようになる。(Cf. p. 120) 人為的記号の機能は印象や記憶を操作可能にすること、さらにはそれらを区別し定着させることにあるのである。ところてかような機能において音声記号は、他の可能な記号に比べ、扱いやすさ、抑揚や音調など多様であること、とりわけ発声器官と聴覚器官の両方に作用することにおいて優れたものを持つ。この最後の点はそれによって、記号活動を行いながら同時にその効果を確かめることが可能になるものである。(Ibid.) 人間が音声記号を特に選んできた理由である。しかし、いずれの記号にせよ記号によって人間が思考、認識、思想の伝達において飛躍的な進歩をとげたことは確かであって、この意味では記号の働きは、観念学の言うように確かに「能動的」なものである。しかしメーヌ・ド・ピランが記号の習慣を「能動的習慣」と呼ぶ時奇異の感じを与えることは否めない。記号になんらか運動の要素が含まれる限り、記号の習慣が運動や知覚の習慣と類似した様相を呈することは当然であり、そうであれば知覚の習慣と同様「受動的習慣」と言われてもよかつたであろうからである。じつさい後に見るように能動的習慣のなかで機械的記憶の習慣と呼ばれるものや感覺的習慣と呼ばれるものは、受動的習慣と大差ないものである。

記号の役割は知覚や記憶を再現(代表)する *representer* ことにあるとされる。能動的習慣の部で扱われる問題は反復がこの再現の機能にいかなる影響をおよぼすかである。この点に関してピランはこの部の冒頭で彼の考えを次のように要約している。習慣は記号の使用を無意識化することによって記号の性質を変え、ひとに記号の源を忘れさせる、

その結果意志的人為的記号が受動的感情的記号になり、記号使用は夢遊症的になって、ひとの反省能力は失われるというものである。(Cf. pp. 117-8) こうして、考えて話しているように見えながら実は無意味に話していることが多くおこるようになる。反省能力が再び活発化するためには「ひととはそれまで習慣的にしてきたことを意図的にやりなおして見ようとしなければならぬ、自分の記号の源へ遡ろうとし、記号の機能を理解し、意志的に記号を再設定し、記号を的確に、一連の(反省的)反復によって、自分の感覚の全印象へ、自分の思考の全産物へ、自分が覚知する全てへ、自分が自分の内と外に感覚する全てへ結びつけようとしなければならぬ(p. 118)」とビランは付け加えている。これはビラン習慣論の結論そのものである。じっさい能動的習慣を論じた第二部で我々に興味深いのはかようなことを論ずる再現的記憶の章である。しかしメーヌ・ド・ビランの歩みにそって、先ず機械的記憶と感覚的記憶の習慣に目を投じよう。

二、機械的記憶と感覚的記憶の習慣

機械的記憶とは「そこでは記号が観念内容もいかなる再現作用も欠いており」「想起が運動の単なる反復に他ならぬい」ような記憶である。(Cf. p. 129)たとえば意味を知らずに文章を暗記している場合である。かような記憶は容易であり確実である。この記憶が初等教育でしばしば用いられる理由である。しかしこの記憶では記号は意味を持たず、何も代表しないから、この記憶の習慣がもたらすものは習慣的行動と同じ迅速ではあるが空虚な自動機制であり、完全に機械的な動作であり、放心である。(Cf. pp. 131-4) その時「分節された語の迅速な連続が……思想内容への反省的な回帰をすべて妨げるから」ひととは次第に観察と反省の能力を失い、「思考はおとろえ、思考力は消滅し、その器官はその真の機能を果たし得なくなり」「知性は対象の無い運動におしつぶされて表面でだけむくんだように膨れあがるのみで、

眞の活力を失ってゆく」とピランは書いている。(p. 136) かような状態から逃れるためには「言葉のこの極端な容易さに用心しなければならぬ (p. 125)」のであり、こうしてメーヌ・ド・ピランはデカルトを思わせる次のような言葉を書くのである。「理性の年齢になるまでは聾啞でいたほうが恐らく我々にとって幸福であつたであろう……、機械的記憶の軛を知らずにすんだであろう。」(p. 135) かような記憶の習慣は、知覚や運動の習慣と同様、受動的習慣のなかに分類されるべきであつたであらう。

感覺的記憶の習慣についてもほぼ同様の事態が見られる。感覺的記憶とはその記号が感情的なもの、想像的なもの、あるいは曖昧漠然としたものしか表現しないような記憶である。(Cf. p. 137) 感情や想像が一種能動的なものを含むことはさきに見た。感情的想像的記号もなんらか能動的なものを含むであらう。かような記号に、人間の生活や生存に關わる何らか根源的なものがあることをピランは、「それは第一本能が我々に知らず知らずの内に表現させるものだ」というように言っている。(p. 138) しかし感覺的、感情的記号はかような根源性にも關わらず、その曖昧さの故に誤解を招きやすいこと、したがつてその習慣がしばしば有害なものを持つことは確かである。詩の場合のようにこの曖昧さが利用されることもある。しかしこの種の記号の頻繁な使用はさまざまな不要領や誤謬の習慣を招き、「それによつて再現のあらゆる能力や眞実性を、また思考のあらゆる現実的な力を無にしてしまふ (p. 136)」のである。ピランは特に幽霊、妖精、魔法使用などの語をあげ、これらが習慣的に使用されるにつれ、いかに人々の思考能力を損なうか、いかに大部分の人々が、無意味無内容の語にあるいは驚き、あるいは陶醉し、あるいは恐れ、あるいは激昂するかを論じ、さらに続けて、哲學者達でさえ彼らがよく意味のわからない語の上に体系をたてようとする時このことの例外ではないと言つてゐる。(p. 142-3) 一般的に言つて、言語が比喩的寓意的表現を持つほどその言語は曖昧で感情的な言

語となり、扇動家や理性の敵どもの愛好する言語になるとも言われている。⁽¹⁵⁾ (p. 144)

こうして感覺的記憶の習慣は機械的記憶のそれと同様、一方では簡便なものを持つが他方で思考にとって極めて有害なものとなりうる。「思考はその習慣的な感情刺激者に執着し絶えずそれを求め呼び出し、もはやそれなしで済ますことも、その影響から逃れることもできなくなる。しかも同時に思考はあらゆる良き養分を嫌悪するようになり、いわば消化の能力を失う。こうして奇想空想に耽る習いの人々は明晰な理性の産物を、自分等の性に合わないものとして、頑くなく拒否するのである。(G. 145)」感覺的記憶の習慣も受動的習慣以外の何物でもないのである。

三、再現的記憶の習慣

本来の認識が論じられるのは既に触れたようにこの再現的記憶とともにである。再現的記憶とは記号が「はっきり輪郭づけられた観念の明瞭な出現をともなう (p. 129)」場合である。メーヌ・ド・ビランにとって観念とは知覚の再現またはコピーであり、あるいは第二知覚である。(Cf. p. 34) このことを彼は例えば球の観念について、球が現に無い時にひとが手の指でその形をかたどってみることによって知覚するものというように、運動的触覚の哲学の立場から説明している。はっきり輪郭づけられた観念の明瞭な出現とは結局は、元の知覚の明確な再現ということになる。この場合そこには知覚、観念、記号という三つの要素がある。観念は知覚をより再現すべきであり、記号はその観念によく対応し、したがって元の知覚によく対応すべきである。これが認識の条件である。

ところで現実の知覚世界はあまりにも不安定である。知覚世界が安定し操作可能になるのは記号によってである。ひとは確定した諸点としての記号から出発しつつ、「記号に新たな操作をほどこし、無数の仕方て記号を精妙にし、結び

つけ、組み合わせ、切りはなす。」(p. 147) こうして新しい観念世界が生まれるのであり、そしてこの世界とともに人類の無限な可能性がひらけてくる。なぜならこの新しい世界は外界の「認識をはなはだ容易にする」(p. 152) からである。記号と観念の役割には大きなものがあるのである。ここでピランは直ぐつづけて「二つの世界の」一方に住んでいても他方を決して忘れてはならない (p. 148) という注意をしている。この注意が意味することは、観念の世界は現実の世界によって絶えず検証されるべきであり、また逆に現実の世界は常に観念世界を参照しなければならぬということである。記号についても同じことが言える。我々は記号に常に頼らねばならないが、記号と観念との関わり、従って記号と知覚との関わりにも絶えず心を配らねばならぬということである。

記号を現実世界に関係付けるものがほかならぬ再現の記憶である。「二つの世界の間の交流が自由になるのはこの記憶によってであり (p. 148)」、「再現的記憶のみが、知覚の諸項をそれらの持つ実際の意味内容とともに正確に再現する。この記憶が絶えず忠実に介入することによってのみ誤謬、幻想、頑固な習慣を防ぐことができる (p. 152)」とピランは言う。ところでこの記憶にたいする習慣の影響は記号に再現の役割を失わせることであり、二つの世界の間のこの交流を阻害することである。このことをピランは、最も普遍的な観念としての数の観念を例に説明している。(Cf. pp. 154-6) メヌ・ド・ピランによると数の観念はその源を抵抗印象の中に持っている。全ての数は一の観念に由来し、一は対象の抵抗の体験に由来するからというのである。ところで一の観念は様々なものに適用されるにつれ抵抗対象から離れ、記憶のなかにそれだけであるようになる。その時一の観念、ひいては数の観念は現実から抽象へと移行し、再現的であることを止めて単なる記号となり、機械的記憶と見分けがつかなくなってしまう。数の機械的記憶が計算にとって有益なことは確かである。しかしそれとともに観念の起源が見失われ、反省の能力もまた失われる。数の計算の微

妙さを知り、その根拠、その原理を洞察し得る人が普通、計算ばかり上手な人ではないのはそのためだとピランは考える。数について言えることはあらゆる記号について言える。記号は同様な仕方での再現の機能を失うのである。

要するに認識において重要なことは、常に知覚または観念を問題にすべきであって、単に記号のみにとどまってはならないということである。「すべては再現の正確さ、忠実さに依存する(p. 15)」からである。ところでピランはここで付け加えて「この再現の能力は頻繁な繰り返しによってより迅速、より容易になるが、だからといって習慣によって単なる機械的なものに変わることがない」と言っている。再現的記憶の積極的で良い意味での習慣が論じられるのはここからである。

再現的記憶の習慣とは、常に知覚へ遡ろうとし、絶えず、再現的記憶を蘇らせようとする習慣であって、この習慣の形成のためには、機械的暗誦はもとより、感受性を過度に刺激するものや曖昧漠然したものなどは禁物とされる。(Cf. pp. 158-9)逆に次のような態度はこの習慣にとって好都合なものとされる。「思慮深い語調、節度のある文彩、正確で明晰な表現、統一のある文構成、固すぎもせず甘くもなく諛いもない発音(p. 162)」がそれである。かような態度の練習は、ちょうど適度な運動が身体にもたらすのと同じ効果を、思考にたいしてもたらす。「かような練習を続けると、中枢器官の全部分が活発になり、各部分間の連絡も多様化かつ強化され、いずれの部分も突出することなく、逆に全部分が、真的知的能力を構成し節度のある均整のとれた思考を形成しているあの均衡状態、あの正確な相互対応を保つようになる(p. 163)」とピランは書いている。再現的記憶の習慣とはデカルトがエリザベト女王への書簡で説いたような正しい思考の習慣に他ならないであろう。

再現的記憶の習慣はこうして他の習慣とはすっかり性質を異にしたものとなる。それは不断の注意を要求し、この点

で既に習慣とは対立したものを持つのである。知覚へ遡ろうとすることは、新しく仕事を始めようとすることであり、単なる反復にとどまろうとはしないことであり、習慣化を拒否することなのである。しかしたとえ習慣化が可能だとしてもそれは極めて困難なことであろう。『習慣論』の最後の二章には再現的記憶の習慣形成の困難にたいするビランの嘆息をうかがわせるものがある。

四、言語の習慣、あるいは、記号、判断および推論の習慣

『習慣論』の最後の二章は「いかにして言語の習慣あるいは同じ語の頻繁な反復が現実存在の判断をはじめ基礎づけるか」という表題の章とその続きとからなっている。メーヌ・ド・ビランがこの二章であつかう内容は実際は、記号と言語の習慣が思考それ自身にたいして及ぼす影響である。ビランは第二部のそれまでの章では、記号の習慣を記号の対象としての知覚や観念との関係において考察してきた。この二章では記号を主に他の記号との関連において考察する。それは一般的には、判断および推論の問題とされるものである。ビランはこれらの問題をも言語と密接に関連させつつ考察するのである。彼の場合思考は言語と不可分なのである。ところで言語に記号と同様な身体運動が含まれており、また人為的記号に自然的記号と同様な性質が認められるので、言語や人為的記号の習慣が、知覚や想像の習慣ないしは機械的記憶や感覚的記憶の習慣と同様な性質を示すであろうことが当然察せられる。ビラン自身も明確に次のように言っている。「それによって自然的記号が始め我々に与えられたのと同じ連合法則、また次いでそれによって我々にその自然的記号の機能がわからなくなったのと同じ習慣の力が、人為的言語記号の使用を同様な仕方でも支配し変化させている。」(p. 164) 実際人為的記号の習慣の叙述は自然的記号のそのの繰り返しを多く含むことになる。このことは原則的

に言つて、此の二種の記号の起源の同一を意味するはずであり、少なくとも人為的記号の習慣は能動的で自然的習慣のそれは受動的だという区別がおかしいことを示しているであろう。しかしこの点はしばらく措いて人為的記号の習慣についてのビランの説明を見てみよう。

人為的記号とは「我々の印象に付加される我々によって設定された運動ないし文字である (Ibid.)」とビランは言う。人為的記号は人間のなんらかの身体行動に依存して出てくるものであり、印象をたがいに区別しやすいうちに、また過去の印象を想起しやすいうちにするのに貢献する。ところでこの点に関する習慣の影響は、人為的記号が指示すべき筈の当の対象に取つてかわることだという。「言葉の発音あるいは想起と、対象の知覚あるいは対象像の出現とが極めて確實かつ迅速にたがいに継起しあうようになり、その結果両者は同じ事物のなかに一体化し同じ本質を持つかのごとく思われるようになる (pp. 164-5)」というのである。そしてビランはここではかような習慣化のうちには内属関係の根拠を見ようとしている。これは第一部の第三章で内属関係の根拠を抵抗感あるいは努力感のなかに見ていたことと矛盾するように思われる。しかし恐らくビランにとつてこの二つの説明はともに真であつたであろう。抵抗感による説明は内属関係の出発点を示すものであり、習慣による説明はこの関係の強化の過程を示すものであろう。「記号をまとつて記憶の中にある全てのものを外部に実在するかのようにならざることを断念せよ、我々の判断作用の深い習慣にも、我々の言語の始めからの観念連合にも、我々がたえず使い身近すぎたその理由がわからなくなった日常の表現形式にも、等しく由来している (p. 165)」とビランは書いてゐる。

現実存在の判断も同じ習慣によるであろう。「いかなる対象も外界に輿行のある形で現実に想定されないかぎり、想像力にたいして明晰にまた強力に再現されることはできない (p. 166)」からである。我々は先に、想像力の習慣に関

連して、想像の産物に外界存在性を与えるという同じ作用を見た。人為的記号の場合の存在想定も人間の思考習慣における或る根源的なものに対応しているであろう。ところでこの想定は想像の場合と同様「多数の臆断をあまりにも生みだしすぎる源泉 (p. 167)」であり、このことの危険さは人為的記憶の習慣の力が想像のそれよりも遙かに強力であるだけに著しいものがあるという。ここにも我々はあの外化という習慣の一般的特長を明瞭に見てとることができ。記号は人間のこのうえない能動性の産物であるが、ひとたび主体の外に外化されると、逆に主体に働きかえし主体を受動化するのである。それは労働者と機械との間の関係に似ているとピランは言う、「労働者が道具を支配することも多い。だが道具が労働者を支配することのほうがもっと多い。」(p. 167, note)

因果性すなわち継起による記号の連合についても事情はほぼ同様である。同じ外化、同じ自動化、同じ習慣の支配がそこに見られる。「その時現実の世界は想像の世界のかけになって消滅し……、すべては言葉の支配下にはいつてしまふ。」(p. 168)「こうして人間精神にとって恥ずかしいことだが、理性の権威よりも明証のあらゆる光よりもさらに大きな影響力を持つ習慣的な信仰、盲目的な信念、頑固な信念が形成され強化されることになる。」(p. 171)これ以上言葉を加える必要はないであろう。

ピランはつづいて「反省判断 *jgements réfléchis*」にたいする習慣の影響を考察している。反省判断とは彼の場合、抽象的複合的概念がその起源への反省をともなって用いられている判断と言えようが (Cf. pp. 171-2)、起源へ常に遡ることは労多いことであり、この労を免除することがとりもなおさず習慣の影響であろう。しかし一旦起源へ遡る労を免れると人は専ら記号のみを事とし、その時反省判断も機械的なものと大差ないものになってしまう。それは前章の表現で言えば再現的記憶が機械的記憶に変貌することであろう。

同様な事態は推論の習慣においてよりよく見ることができ、ピランにとって推論とは「各記号をそれらの順序にしたがって、また予め各記号に与えられている正しい値において喚起すること(p. 176)」である。推論の習慣化とともにこの推論の働きが迅速になり、それとともに記号は互いに接近し、互いに浸透しあい、ついには出発点と結論が直結し推論全体がいわば一つになる。こうして極めて複雑な推論が大変迅速になるのであり、「天才は驚の俊敏さでもって論証の長い連鎖を通覧し、無数の観念を重ねあわせ、新たな巨人として天界に雄飛する」とピランは書いている。(p. 178) この点推論の習慣の効用には目ざましいものがある。しかし推論の迅速化とともに、判断の場合と同様、注意はうすれる。このことは推論が複雑多岐であるほど起こりやすく、その時「既知の観念にたいする無関心、軽薄、極端な速さ、観念の構成にたいする無知、同じ作業への絶対的な従属」が生じる。(p. 181) 推論の習慣は一方では人間の能力を最も高めるものであるが、他方では人間から能動性をまったく奪い去るものである。ここにピランは苦慮のにじむ次のような問題を出す。「何故速さや表面上で獲得されたものがかくもしばしば力強さや深さの面で喪失されてしまうのか。何故習慣は思考能力に翼を与えたあとで、自分で自分の方向を決めることを思考に許さず、同じ一つの方向に頑強に固定しようとするのか。」もし普通言語の計画、言い換えれば「推論の一般的習慣 *habitude générale de raisonner* (p. 186)」が現実化することがあるならば、「それは習慣が勝ち誇る時だ」とピランは書いている。(p. 190) 「人間の認識がより完全になればなるほど、天才がより力を持って持つほど……、恐らくそれだけ発展の可能性はせばまり、それだけ普通の人間の能力は極度の容易さの故にかえってその能動性を失うであろう」とも書かれている。習慣の矛盾がここにその最も尖锐な姿で示されている。「精神の梃子は物理の梃子と同じである。いずれも我々を助けてくれる。しかししばしば助けてくれすぎて、我々の本来の力の発展を阻害する(p. 191)」のであり、ピランは、梃子がない故かえって

強靱な頭脳を持っていたという理由で、古代の幾何学者を賞揚してさえない。

こうして『習慣論』の最後の言葉は、習慣の安易な坂にたいする不信と警戒のそれに他ならない。「疑わしいいかなる言葉、いかなる要素も許さず、それらをしぼしば再検討し、作り直し、さらに検証すべきである。この有益な不信は真の哲学者たちがその手本と教訓とを与えてくれたものであり、盲目的習慣にたいする唯一の対抗者であり、知恵の源であり、真の進歩の積極的な原因である (Op. 192c)」という言葉でビランは『習慣論』の本文を閉じるのである。ところでこの「有益な不信」はいかにして可能であろうか。ビランはある箇所に次のような興味深い注を残している。

「人間は、そしてただ人間のみが、能動的な反省の能力を与えられていること、この能力によって機械的習慣の困いから絶えず逃れでて自己の発展可能性を限りなくひろげていることを知らねばならない。……習慣がいくらその範囲を広げ、その中に我々の能力を閉じこめようとしても無駄である。人間には習慣の枷を打ち破り、その惰性の力をのりこえて、新しい行動をめざす力が常に残っている。」(p. 175 note) この「能動的な反省の能力」とは何であろうか。この問題に答えんがためにこそビランの以後の学問的努力はあったと言えまいか。それは我々の内にある真の能動的なものの追求に注がれるのである。

しかしそれにも関わらずやはり習慣はその力を振るい続けるであろう。どんな判断、どんな推論も習慣によって容易かつ迅速にならない限り効果的なものとはならないからである。それどころか「我々の最も深い思想でもそれが真に有効に応用され我々の行為に影響を持ちうるのはただ、習慣をとおしてそれに固定性、迅速性、そして臆断の持つ本能的な力が与えられた時だけである。」(p. 182 note) そうだとすれば習慣の問題は単なる認識能力の問題の範囲を超えて、実践の問題、社会の問題、歴史の問題、さらには宗教の問題へと導くものであろう。

第五章 ピラン習慣論の意義

我々は以上にピラン習慣論の概略を見た。そこには興味深い多くの観察や巧みな分析にまじって、少なからぬ不整合や矛盾があった。一見したところこの書は理論構成においてよりも事実観察においてより優れている書物であるように思われる。しかしその多くの分析が啓示的な洞察によって人をひきつけるものを持つことも確かである。不整合や矛盾はピランの前進を阻むものではなく、反対にそれらこそピランの以後の思索の原動力となったものである。ピランの『習慣論』は完成した理論書というより寧ろ、その不整合や矛盾のゆえに却って豊かな未来を秘める書物であろう。

我々が以上で見た幾つかの不整合や難点を整理しておく。最も重要なものとして次の三点が挙げられる。(1)第一の難点は感覚や想像の中に何らか能動的なものが存在することに關わる。ピランは「感覺的能動性」という觀念学の観点からは矛盾した表現を使わざるを得ず、この表現は、感覚や想像は受動的だというそれまでの定式を改めることへ誘うことになる。(2)習慣化した知覚や運動が示す受動的感覺的性質はピランの分析を混乱させるものであった。知覚や運動の明確化にともなつて人は寧ろ無意識的になり盲目になる。この事實は「動覚」が觀念学において認識論的に占めていた地位に疑いを向けさせるものであった。(3)意志的能動性の最も効果的な道具としての記号が反復されるにつれ自動的になり、受動的感情的性質を帯びさせることもピランの立場にとって厄介であった。實際記号は身体の運動ではあつても、端的に能動的なものではないのである。

これらの難点はすべて、受動性、能動性、運動の三者の間の關係にかかわっている。受動的習慣と能動的習慣という極めて曖昧な区別もやはりこの關係に關連している。これらの難点が、ピランがともかくも前提していた觀念学の認識

理論に起因するであろうことは既に触れたことである。学士院の出題者にとっては、デステュット・ド・トランの報告の中の言葉も示すように (Cf. p. 210)、観念学の認識理論が自明の前提であった。ビランがその分析の過程で観念学の認識能力分類を再検討する必要にせまられていったことについては既に十分述べたと思う。他方でトランの動覚理論がビランの習慣分析にかなりの程度役だったことも確かである。ビランの分析はその出発点を動覚理論においたが、そのむかう方向は動覚理論から離れることにあったと言ってもよいであろう。

習慣分析のビランの根本的な態度に曖昧さが存在することも事実である。一方では習慣は思考の諸能力とは無関係であり、習慣に先立って存在する諸能力にいかん習慣が作用するかが問題であるように見える。他方で習慣は思考の一要素であり、しかも本質的な要素であって、習慣がいかん思考諸能力の形成に参加しているかが問題であるように見える。学士院の設問の表題は前者の見解を支持するように思われるし、『習慣論』の第二部はこの線にそって見えるように見える。しかし第一部は後者の見解にたつもののように思われ、特にビランが『習慣論』冒頭の題辭に借用した「精神のすべての働きは運動もしくは運動の反復以外の何であらうか」というボネ Bonnet の言葉もこれを支持するように思われる。この曖昧さもビランが既定の精神能力分類をそのままに受け入れたことに起因するであろう。それは運動と精神能力との関係の全面的な再検討なしには解決不可能な問題であろう。そして習慣の問題は実際にこの再検討を要求するものであった。

ビランによって必ずしも十分論じられてはいないが、精神諸能力と運動との関係の再検討にとって有益と思われる問題に、類推 *analogie* の問題と模倣の問題とがある。類推についてはビランもその重要性を認めていた。⁽¹⁶⁾ 記号の形成において類推がはたす役割について彼もふれている。例えば自然記号の形成の際、感情的類似 *analogie sentimentale*

がものを言っていること、ここでは記号と対象あるいは印象とのあいだの類似と、記号相互間の類似という二重の類似が問題になることを言い (p.p. 121-2) 、『その理由として「類似のみが……我々にとって救いの手であり休息場所であり、我々の移行を容易にし、我々の変化を快適にするものであり (p. 132)」また「観念の再現を明瞭にするのに……好都合なものである (p. 134)」からだと言っている。一般的に言って「言語を作りだすひとは対象の多様さを区別する必要に迫られないかぎり記号の数を増やそうとしないものである。ひとは差異よりも類似をより多く追いもとめる。この点でひとは、幼児があるいは既知の固有名を一般化したり、あるいは数の名を持ち出したりして、似ているところのある対象を呼ぶ時に行っているのと同じやりかたで、記号や対象を区分しようとする (p. 123)」のであり、「命名と想起の仕事を不思議によく簡略にし容易にするこの方法はひとの第一習慣の一つであらう (Ibid.)」とさえも言われている。ある箇所ではピランは習慣の問題にたいして類似 (類推) が持つ決定的な重要性を論じて「我々の習慣の範囲が拡大するのはただ類似 (類推) によってのみである (p. 184)」と書いている。しかしメーヌ・ド・ピランはこの問題を彼の習慣論のなかに正当に織りこもうとはしなかった。彼の場合この問題は記号のそれのまゝに影をうすくしている。

模倣の問題についてもほぼ同様の事態が見られる。出版されたテキストではこの問題は感覚的記憶の習慣の章で軽くふれられるにとどまる。そこでは「感覚運動的存在は本能的に模倣者である」こと、「幼児ははじめ運動と言葉を同じ模倣の原理によってとらえる」ことが言われるにとどまる。(p. 140) しかし出版後ピランはこの問題の重要性に気づいたようである。次のような注を加えている。「模倣はほとんどすべて運動性 *mobilité* に基づく。なぜなら我々が模倣できるのはただ運動だけだからである。ところで習慣とはいわば我々自身の模倣に他ならない。あるいは、他人を模倣しようとする傾向と我々がかつて行ったことを再び行おうとする傾向とは同じものである。」(Ibid.)

類推と模倣というこれら二つの問題はいずれも観念連合の問題とふかく関わっている。習慣の問題自体が観念連合の考察を要求するものである。しかしメーヌ・ド・ビランは特に立ち入ってこの考察を行ってはいない。彼にとって習慣現象そのものの研究よりも、精神諸能力と習慣との関係の問題のほうが、あるいは寧ろ精神諸能力そのものの研究のほうがより興味を引くものであった。彼の哲学の以後の展開もこの見解を証示するであらう。習慣そのものの考察はのちのラヴェッソンらに寧ろゆだねられると言ってよいところがある。

習慣の一般的性格はすでに触れたように、運動性は高めながらも能動性を弱めて受動的なものにすることに⁽¹⁷⁾ある。この性格の故に習慣の問題は、我々の内にある真に能動的なものは何かの問いに特に我々の目を向けさせてくれる問題なのである。言い換えれば、我々から能動性を徐々に奪って自動機械の惰性状態にちかづける習慣は、人間の真の能動性へと遡るために辿るべき道を反面的に最もよく指示するものでありうる。「習慣はそれ自身で知覚を構成する二つの要素を分離あるいは分析する」とメーヌ・ド・ビランは後に言っている。この意味で習慣はじっさい打ってつけの問題であった。マディニエも次のように書いている。「習慣の影響についての学士院の設問はメーヌ・ド・ビランの仕事に比べて幸いであった。それは彼に感覺性と動覚性との彼による根本的区別を確認することを可能にしたが、さらに大きく役にたった……。この設問はビランにとって特別な反省の機縁になったのである。なぜなら習慣は本来我々の活動を徐々に覆いかくし、ついにはあの根源的な⁽¹⁸⁾われ在り⁽¹⁹⁾を消滅させるものだからである。習慣の考察はこの主体性の判断の明確化と曖昧化の諸条件そのものの研究になった。」こうしてビランはこれ以後真の能動性の追求へ向かう。この意味で「特に『習慣論』の諸段階をとおしてあきらかになってくるものは自己の主題をしだいに意識しつつある一人の著作家である」とのグイエの言葉には極めて正しいものがあると言える。

ところでビランはある意味で既に『習慣論』で、人間における真に能動的なものの本質をつかんでいたと言えないだろうか。最終章で彼は「本当に活動しているものとしてはただ想起あるいは記憶の能動的能力があるのみである」と書いている。(p. 176-7)『思考構造論』ではこの点についてより明確に次のように書かれている。「ある哲学者の巧みな表現によれば記憶は時間の大河のなかに思考が築きあげた堤防のごときものであるとのことだが、私はさらに、習慣が思考を押し流してゆくあの早い一様な流れのなかに思考が築きあげた堤防だと言いたい。」⁽²⁰⁾この意味では記憶こそが真の能動性の名に値するものにならう。ここで当然ベルクソンの名が思いつかべられる。しかしビランの場合記憶は主体—対象の二元性と不可分である。能動性そのものがこの二元性を含みもつとされる。この二元性を消去してすべてを對象的なものにすることが習慣の本質的作用の一つであった。習慣のこの対象化外化の働きは『思考構造論』でも強調されることである。⁽²¹⁾能動性の追求はこの根源的な二元性を回復する試みでもある。ところでこのことは『習慣論』でも主体と対象との根源的対立としてある程度試みられていたものである。先に見たようにビランが、現実の世界と観念の世界との二つの世界の一方に住んでいても他方を決して忘れてはならない、と言うとき、そこにはこの根源的対立を示唆するものがあると言えよう。ビランはまた「運動の力は(努力の二つの項に)等しく同時に注がれねばならない(p. 126)」など、主体と対象、主体と客体の双方に常に注意を払うことをしばしば強調しているがやはり同様趣旨に基づくものであろう。『習慣論』以後のビランはこの根源的・二元性の性質や反省的記憶の働きの究明に向かうのであり、その究明から根源的事実、内部感覚、個人的想起、反省、関係、努力、能動性、意志等についてのビラン独自の個人的な思想が生まれてくるのである。

実際習慣はビランにとって幸いな問題であった。それはいかに真の能動性が受動的な自動運動に頹落してゆくかを彼

に教えることによって、逆に真の能動性を追求する道を彼に開かせたといえよう。習慣の問題の利点にはさらに、それが精神活動を常に運動、あるいはより一般的に行動との関係において考察するようにさせた、ということが挙げられよう。ビランはしばしばカントに比べられる。しかしビランの場合精神的活動は身体的行動と不可分であり、その意味で理性の批判は実践の批判と常に不可分であった。

ビランは『習慣論』以後習慣を離れ人間における真に能動的なものの追求に向かう。これに対しラヴェンソンは習慣に立ち戻り、自然哲学的な視野から習慣をより包括的に捉えなおそうとする。⁽²⁾

注

- (14) ビランが『習慣論』に先だって書いたものに「記号の影響についての覚え書き Notes sur l'influence des signes」と題した論文がある。コンディヤットの『人間認識起源論』を手掛かりに記号の機能を論じて、この第二部の先取りとなっている。
- Cf. *Oeuvres complètes de Maine de Biran*, Tome 1, Slatkine, pp. 240-309.
- (15) かようなことを書く時のビランの念頭には大革命の生々しい記憶があったことであろう。やはり『習慣論』に先だって書いたものに「革命の諸原因 Causes de la révolution」など一連の道徳政治論文があるがそのなかでビランが革命による混乱の第一原因として「北方の狩獵人」としての先祖からの野蛮の精神を挙げながら、他方エルヴェンウスの理性主義も無秩序にたいし責任が有るとしているのは興味深い。 Cf. *Ibid.* pp. 159-166.
- (16) 類推がコンディヤットにおいて持つ意味については三輪正著「コンディヤットと習慣の問題」(『カルテシアーナ』第八号) 第四章参照。
- (17) Maine de Biran, *Mémoire sur la décomposition de la pensée*, éd. P. U. F., T. I, p. 117.
- (18) G. Madinier, *Conscience et mouvement*, F. Alcan, 1938, p. 97.
- (19) H. Gouhier, *Les conversions de Maine de Biran*, Vrin, 1949, p. 135.

- (20) Maine de Biran, *Mémoire sur la décomposition de la pensée*, éd. P. U. F., T. II, p. 127.
- (21) Ibid. p. 120, p. 123.
- (22) メーヌ・ド・ピランの習慣論のみを扱った論文は必ずしも多くないが次のもののみを挙げておく。
 西村嘉彦「努力の意識（メーヌ・ド・ピラン『習慣論』の研究）」大阪市立大学文学会『人文研究』第一卷第八号第十号第十
 二号。一九五〇年。

（文学部教授）